

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日出版  
昭和三年十月一日発行 第四百二十四号第十号

# ホトトギス

十月号



## 風雅の小筥（四十五）

廣太郎

このコーナー「三十九」でも述べたが、御存知の通り、俳句の季題は旧暦が基準になっている。明治初頭に日本ではそれまでの太陰暦から太陽暦に変わり、約百五十年が経過した事になる。日常生活ではすっかり太陽暦が定着して、三月から五月が春、六月から八月が夏、九月から十一月が秋、十二月から翌年の二月が冬という事になっている。そして俳句の季題では、申し上げるまでも無いが二月四日頃の立春、五月七日頃の立夏、八月七日頃の立秋、そして十一月七日頃の立冬を基準に春夏秋冬となる。

前述日常生活ではすっかり太陽暦が定着していると申し上げたが、確かに二月が春、五月が夏、八月が秋、十一月が冬と俳句をなさらない方に申し上げると、やはり怪訝な顔をされる事も事実である。歳時記でも季節の変り目の季題を調べると、例えば五月の「憲法記念日」は春だが「子供の日」は夏の季題として掲載されており、何か矛盾を感じられる方もおられるのかも知れない。しかし長年俳句に親しんでいると、例えば立春の日には何かそれまで寒かったと感じていたのが、何か少し暖かさを感じる事も事実である。そして行事にしても、例えば「七夕」は、現在当然の事ながら太陽暦の七月七日に一般的には行われているが、毎年この日はほぼ梅雨の真っ只中で、先ず晴れた夜空を見上げる事は出来ない。現在でも宮城県仙台などでは八月に行われており、こちらの方が星空を仰げる確率は高いだろう。因みに令和四年は八月四日がこの日に当る。俳句の心で七夕を祝ってみるのも一興だろう。

# 旬日記 汀子

令和二年十月十三日 芦屋ホトトギス会

名月の空たまはりし家居かな  
秋の声とも消息を伝へ来し  
団栗に足を取られしことも過去  
揃ひたる顔爽やかに遠会釈

十月四日 下萌句会

紹介を済ませし句座に秋の声  
爽やかに誰彼親しかりし句座  
団栗の二三転がる洗濯機  
爽やかに増えゆく仲間あることを

十月五日 ロイヤル俳壇

未だ誰も来てはをられず秋灯下  
シャンデリアとて華やげる秋灯  
秋灯故人の話二た三言  
問はれもす健康も又冬に入る  
席空けて座る満席秋灯

十月八日 清交社

初菊を惜しまず剪つてくれしこと  
清水汲むさりと濡れしそのままに  
邂逅の挨拶交はず秋灯  
台風の近き降りやう出掛け来し  
台風の気配となつてきたる雨  
大方は揃ひて会の爽やかに

十月十三日 大阪倶楽部

赤い羽根つけてやうやく落着きぬ  
出席の叶ひし会に秋の声  
椋鳥の来てゐる声と聞き分けて  
体調のとのひしより秋めきぬ  
み吉野の桜紅葉の頃と聞く  
次々と秋の予定を返上す  
聞きとめて遠くは秋の声かとも

十月十三日 綿業倶楽部

特別な日かと問はれて今年米  
羽休め来しか元気な渡り鳥  
新米と分る炊きたて御飯かな  
樹々騒ぐ加はつてぬし渡り鳥

十月十四日 西の虚子忌

足弱を無理なく修す西虚子忌  
皆齢を取りしと集ふ西虚子忌  
叡山で会ふ楽しみの西虚子忌

十月二十日 有恒俳句会

目の覚めて星を仰ぎぬやや寒し  
朝より明渡したる秋の晴  
実感のなきまま冬の近かりし  
白萩のこぼるるままに客を待つ  
身に添へばやや寒心地よかりけり  
秋晴も客をもてなす一つかな  
客のある日のもてなしの秋の晴

十月二十日 無名会

松手入済みたると見て通りたる

用一つ済ませし安堵秋の晴  
冬近し予定次々新しく  
秋惜む庭に咲くもの終るもの  
気がかりな西の虚子忌の過ぎしこと  
何よりも秋惜む日の晴れしこと

十月二十一日 夏潮句会

快晴となりし今日まで秋らしく  
ただ持つてゐる杖爽やかに使ふ  
爽やかにステッキ持つて行くことに  
松手入今日は天辺まで登る  
やや寒きこと心地よき晴となる  
又一人西の虚子忌を語る友

十月二十三日 時雨句会

書き初めて夜寒を忘れをりしこと  
夜寒など言うてはをれず出掛け来し  
取り戻す生活のリズム夜寒とて  
やさしさの心にしみる秋の雨  
夜寒とていつか忘れてをりしこと

十月二十三日 アネモネ句会

止みて又降る秋の雨旅衣  
叡山の桜紅葉も遅れぬし  
やさしさの心に触れて秋の雨  
今桜紅葉はじまる吉野かな  
邂逅の友なつかしき秋灯  
この部屋にいつもの仲間秋薔薇  
今日の風明日へつなぐ冬ぬくし

山田閏子句集 序句

# 廣太郎句帳 廣太郎

令和二年十月十日 蕉心会

ハライソへ伸びゆく丈や曼珠沙華  
水澄みて三角池といふ虚ろ  
雨男とても期待の今日の月  
今日の月雲に伺ひ立てもして  
鶯の贄にはなりたないなりたない

十月二日 カトリック新聞選者吟

秋の声水凹ませてをりにけり

十月三日 菅屋ホトトギス会

秋の田を車窓に鉄路五百軒  
新酒酌む丹波堅田を梯子して  
団栗の四つに机上改る  
久々に葉流さんといふ秋の声

十月四日 野分会菅屋例会

曇天を持ち上げてゐる照紅葉  
秋気澄む車窓に富嶽嵌めてより  
鳴くものに飛びゆくものに秋気かな

十月四日 青嵐会菅屋例会

鎌倉に人遠ざけて楓 & Knight 落つ  
校長の訓辞は長し運動会  
恙の身榎植は庭に落つるまま  
来年に統合控へ運動会

十月七日 NHK文化センター

透明に暮れてゆくなり月今宵  
万物を総嘗めにして颱風裡

朝寒の都心に人の声戻る  
十月八日 土筆会

長月のバズルこんがらがつてをり  
長月の長雨を呼ぶ雨男  
長雨といふ水嵩に秋の川  
長月の電話短く恙告げ

十月十三日 北國文芸選者吟

秋の川水尾ゆつたりと渡舟かな

十月十四日 西の虚子忌

峰寺の露の一步に忌を修す  
運転は諦めてふ秋の声  
十月十五日 前議員句会

薄紅葉忌心ほどに染まりけり  
柳散る銀座そろそろ灯る頃  
木の実落つ山の消息伝へつつ  
十月十五日 登高会

吊し柿村に活気の戻り来る  
新しき水の表情秋の川  
太陽に色を貰ひて吊し柿  
水底に色足してゆく秋の川

十月十六日 廣邦会

鳴き声の消えゆく闇や小鳥網  
小鳥網虚しく羽の動きけり  
十月十六日 廣邦会  
むく抱き大樹は楽を奏でたる  
むく放ち大樹萎んでゆきにけり  
木の実踏む音に故郷近付けて  
十月十九日 朝日カルチャー若草句会

小鳥来る都心の空気和らげて  
一木に楽の生れて小鳥来る  
秋雨に傘増えてゆくふえてゆく  
小鳥来て千年杉の若やげる  
十月二十日 若水句会

鶴来る出水の句碑を俯瞰して  
秋祭鳥居潜れば風甘し  
じねんじよに飯喜んでをりにけり  
農に生き農に殉じて秋祭  
鶴来る空の変幻突き抜けて

十月二十五日 青嵐会東京例会 句中中止選者吟

富士よりの風秋の田を磨き上げ  
恋心少し芽生えて秋気澄む  
冬支度先づは心の整理から  
日の本の空塗り替へて鶴来る  
山の山色付き初めて秋祭

十月二十五日 野分会東京例会

山の神迎へ照葉の極まれる  
この坂を上れば秋気澄む庵  
妖しげな二人の会話照葉道  
十月二十七日 ホトトギス社句会

泥濘を避けて虚子塔草紅葉  
秋雨にリズム刻みて刀鍛冶  
年尾忌や寿福寺固く閉ざされて  
秋雨にふと虚子の声横川の忌  
十月二十八日 目黒学園句会  
残菊として供華としていよよ白  
教会の鐘の音高し天高し

# 雑詠

## 廣太郎 選

人生を横たへてゐる籐寢椅子 熊本 岩岡中正  
 母の日も母も遙かと思ひけり 同  
 闊達な母でありけりカーネーション 同  
 窓若葉命静かに消えゆきし 東京 岩村恵子  
 夫逝きて仰ぐ若葉の空痛し 同  
 哀しみを笑顔で包み五月ゆく 同  
 春宵の灯へ恋占の手をひらく 渋川 木暮陶句郎  
 栄螺みな銀河の蓋をして眠る 同  
 花の寺深きに千手観世音 同  
 築を組む比良の瀬音を逆ひて 奈良 古賀しづれ  
 美しき造形は罨築を打つ 同  
 遠嶺星築の番屋の寝落ちけり 同  
 高階の都心眺望遠霞 長岡 安原 葉  
 徑に沿ふ雪洞残花あるうちは 同  
 薔薇の芽や新傾向句心せん 同  
 職退きて家族に使ふ日永かな 米子 中村襄介  
 葉桜となりて雑木に戻りたる 同  
 屈託を山の新樹に解きけり 同

梅雨激し止まざる音の籠の中 香川 湯川 雅  
 踊りつつ仕上る衣装 踊花 同  
 追ひきれぬ風追ひ続け鳶茂る 同  
 虚子の忌を修す米寿の翁となり 相模原 木村享史  
 富士を仰ぎひとりの虚子忌暮れにけり 同  
 蛇穴を出て見つからぬやうに行く 同  
 老鶯の見せ場心得役者ぶり 神戸 和田華凜  
 ほたる橋渡り紫陽花浄土かな 同  
 若冲の赤の帯締め単衣の夜 同  
 ばんやりと熟れ色となる麦畑 八尾 山下美典  
 舫ひ綱ぎいと卵浪に応へけり 同  
 直線の道青麦の風に沿ふ 同  
 巨大なる蜘蛛の小さく死んでをり 神戸 藤井啓子  
 むらさきは黒より昏し紫蘇畑 同  
 青紫蘇や身のうちに風吹き抜ける 同  
 水中花今宵叫びてゐるごとく 東京 阪西敦子  
 けふよりの新茶引戸のがらと鳴り 同  
 べけべけと急須を鳴らす新茶かな 同  
 大蜘蛛の足の長さの音であり 京都 山崎貴子  
 夜に爪切りて蜘蛛まで現はれて 同  
 大原の里赤々と紫蘇畑 同  
 春眠し眠しと五百羅漢かな 静岡 須藤常央  
 社あり袋掛ありビール狭間 同  
 登頂の明日へ麦飯炊くことも 同

# 雑詠句評（九月号より）

春闌けて花壇は色を極めたる 八尾 山下美典

季題「春深し」の傍題「春闌く」が詠まれた句である。花も散つて木々は緑の装いを急ぎ、春も盛りを過ぎたところになると、草花が植えられてあるどの花壇も、みな見事に咲き溢れてその美しさを誇り、見る人の心を和ませてくれるのである。その花壇の情景と雰囲気が季題を通して読む側にもよく伝わってくる句である。

（葉）

公園等の花壇は、園丁の方がしよっちゅう手入をして、一生懸命花を咲かせる為働いておられるのをよく見るが、春も闌になつて咲き満ちている色々な種類の花は、季節の清々しさと相俟つて一際美しく感じるだろう。そんな様子を「色を極める」という表現で見事に景を描いている。（廣太郎）

花吹雪貫く小鼓の一打 西宮 本郷桂子

小鼓は本当に打つのが難しいということを最近伺った。もちろんただ打つのではなく、音を響かせることがということだ。「小鼓の一打」ももちろん、花吹雪の中、振り上げた小鼓を（例えば人の頭に向けて）振り下ろすような事件性のある「一打」ではなく、小鼓を「ぼ」と打った音が、花吹雪の向こうから、距離を感じさせることなく聞こえてくるということだ。私たちがこの句を読んで間違うことがないように、桜吹雪のこちら側の人も、それを他の音と間違うことはない。「見えないけれど確かな」無限にあるそんな一瞬のうちのひとつを、その「見えなき」も「確かさ」も損なうことなく描く。（敦子）

令和三年四月十、十一日例年予定されていた「吉野くつろぎの旅」は今年もコロナ禍で中止されてしまったが、奇しくもNHKの番組で十一日この吉野の桜の様子が中継され、かの大倉源次郎氏が落花舞う中小鼓を披露されていた。小鼓の透き通った音色が花吹雪に命を吹き込んでいた。（廣太郎）

天地有情

心子選

もう慣れし自肅家居の春の昼  
 はやばやと咲くと吉野の花便  
 闇汁の中紫に光るもの  
 闇汁の匂ひに箸の止まりけり  
 きのふよりけふ花は葉に人は老い  
 我老いしこと春惜む心にも  
 梅雨深く陰々と過ぎ日曜日  
 梅雨深し句も字も下手になるばかり  
 春行くや形見となりし文庫本  
 人しのぶとき仰ぐとき風薫る  
 華やがぬ心は秘めて薔薇を剪る  
 窓開けてみれば雨音額の花  
 春愁や災ひ去る日何時ならん  
 春愁やホ匂先達の亡きを知る  
 夕星のひとつが光る新樹かな  
 夏場所や川風にのるはね太鼓  
 老鷺の声に諾ふ旅吉野  
 目覚むれば車窓植田につぐ植田

長岡 安原 葉  
 同 同 稲畑廣太郎  
 東京 同 相模原 木村享史  
 東京 同 今井千鶴子  
 同 同 熊本 岩岡中正  
 同 同 龍ヶ崎 今橋真理子  
 東京 同 河野昭彦  
 同 同 山田閨子  
 同 同 高濱朋子

水見舞兼ねる旅なら許されよ  
 大灘にこぼるるばかり花蜜柑  
 自肅なほこんなにも風薫るのに  
 梅雨憂しとせぬ顔揃ふ親しさよ  
 一村を圧して匂ふ栗の花  
 吾を宿す母の浴衣の写真かな  
 菜の花やこはごは渡る沈下橋  
 四万十の清き流れに春惜む  
 けふはしも芦屋の句座に都草  
 秋櫻子絶筆の書を曝しけり  
 揺れゆれず風を選ぶやに手鞠花  
 梅雨ひそかワクチン接種の順を待つ  
 吊橋を三つ渡つて鮎の宿  
 化粧塩巾ふやうに鮎に振る  
 咲くまでを引き留められて女王花  
 咲きさうな月下美人のふと揺れる  
 短夜や句帳の余白そのままに  
 日の光遍く代田俯瞰せり

神戸 山西商平  
 同 同 西宮 海輪久子  
 同 同 神戸 三村純也  
 同 同 鎌倉 星野 椿  
 同 同 神戸 和田華凜  
 同 同 淡路島 高田菲路  
 同 同 神戸 池田雅かず  
 同 同 宝塚 水田むつみ  
 同 同 淡路 木下圭子